

『ビュビュ・ド・モンパルナス』 試論

－ « savoir » による人物描写とその効果 －

東海 麻衣子

はじめに

1901年に出版された『ビュビュ・ド・モンパルナス』は、シャルル＝ルイ・フィリップの代表作だが、その評価の高さには驚くべきものがある。とりわけ、それまでフィリップと面識のなかったポール・クローデルやアンナ・ド・ノアイユ、レオン・ブロワといった文学者たちの送った賛辞は特筆に値する。例えばブロワは、小説についてのアンケートに答えて次のように語っている。

Des romans ? Il n'y en a point. Il n'y a que des romans-feuilletons. Un jour, Rictus – le seul poète de génie de notre époque – m'a dit : ' il y a un romancier que je vais vous faire lire.' Et il m'a prêté *Bubu de Montparnasse*, de Charles-Louis Philippe. Ce livre m'a beaucoup étonné. Cet écrivain n'a pas de talent, il a presque du génie. Du génie dans l'expression. C'est un homme tout à fait remarquable. (pp. 240-241)

またフィリップの死後、1932年になって英語版が出版されるのだが、T.S. エリオットがその序文を書いている。以前からフィリップを愛読していたエリオットは、中でも『ビュビュ・ド・モンパルナス』をフィリップの最高傑作とみなし、次のように評価した。

Il y a beaucoup de romans des bas-fonds, du vice et de la dépravation des grandes villes. Romans sentimentaux, romans satiriques, romans polémiques, romans réformistes, romans scabreux. *Bubu* réussit à n'être rien de tout cela, et surtout pas un roman scabreux. (p. 248)

1900年代、娼婦というモチーフは、小説や演劇において盛んに用いられた。バルザック、ゴンクール、デュマ・フィス、ゾラ、モーパッサン…… しかし、『ビュビュ・ド・モンパルナス』はそのいずれとも似ていない。フィリップが影響を受けた

のはむしろ、トルストイやメテニエ¹⁾といった作家たちであったが、もちろん彼らの亜流でもない。

『ビュビュ・ド・モンパルナス』は、パリの娼婦をモチーフにしながらも、フィリップの実体験をもとに紡ぎだされた、それまでにない小説だったのである。

20世紀初頭に出版され、今ではあまり読まれなくなってしまった『ビュビュ・ド・モンパルナス』。我々は、この小説を今一度読み解いてみたい。そして、今なお古びていないその斬新な表現方法から、フィリップがこの小説に潜ませた意図を探ってみたい。

I. 《savoir》の「偽客観的」用法について

本稿で我々が注目したいのは、《savoir》による人物描写である。三人称の主語が、que 以下の内容を「知っている」と言うとき、その表現は、人物描写にどのような効果をもたらすのだろうか。それを考えることから、この小説を読み解いていきたい。

145 ページから成る中編小説『ビュビュ・ド・モンパルナス』において、《savoir》という動詞は計 103 回使われている。と言ってもこれは、《tu sais》といった問いかけや、「～できる」という意味で用いられているものなどを含めた数であって、主語が従属節の内容を「知っている」とする文章に限った場合、その使用例は 21 回である。そしてこのうち、過去形の主文に、現在形の従属節が導かれている例を数えてみると、計 13 回の例があることが分かる。

本論では、この時制に注目してみたい。あえて時制の一致をせず、主節を過去形に、従属節を現在形にすることで、どのような効果が生み出されているのだろうか。

まず以下の文章を見てみよう。

Marthe savait que l'on ne court aucun danger en acceptant l'invitation d'un jeune homme bien élevé. (p.72)

このように、que 以下の文章を現在形にすることで、主語が「知っていた」とするその内容は格言めいたものとなる。しかし、あたかも一般論のように語られ、説明を要さない自明のここのように提示されるその内容は、この場合、まったく個人的なものだ。

妹のベルトとブランシュを連れて踊りに出かけたマルトは、そこでモーリスに出会う。礼儀正しく、ベルトをダンスに誘ってもよいかとたずねるモーリスに対し、

安心感を抱くマルト。「礼儀正しい青年からの招待に危険はない」ことを「知っていた」マルトは、その信念に基づいて、モーリスの誘いを承諾する。それによって、ベルトはモーリスと知り合いになり、その後生活を共にするようになるのである。

ここでマルトは「知っていた」と言うが、では、果たしてマルトの「知っていた」こと、その確信は、正しかったのだろうか。その後モーリスがヒモとなり、ベルトが売春婦となったことを知る読者には、それが皮肉な言い回しであることがよく分かる。

こうした「客観的な事実と見せかけて実はそうではない」というフィリップ独特の文体をレオ・スピッツァーは、「pseudo-objective motivation」（「偽客観的動機」）と名付けた。とりわけ、「à cause de」を中心とした原因節に着目し、論を展開したスピッツァーであるが、本稿で取り上げる「savoir」についても同様に、その「偽客観性」を指摘している。その部分を取り上げてみよう。彼は以下の一例を挙げ、次のように分析している。

“Elle [=Berthe] savait de quoi se compose l’amour depuis qu’elle laissait les mâles après elle courir... Elle savait qu’il faut convertir l’amour en espèces, car l’amour est fatigant, et c’est l’argent qui reconforte. Tout cela, Berthe le savait à vingt ans” [...] Although the maxim is explicitly characterized as derived from Berthe’s experience, the use of *savoir* [to know] and the present tense nevertheless suggest acknowledgment of a common truth.²⁾

つまり、個人的な経験から引き出された内容が、一般的な真理と見せかけられているということである。スピッツァーは、この「偽客観的動機」によって、「apologie」と「ironie」のトーンが生み出されていると指摘した。

この「偽客観的動機」は、その他の「savoir」の用例においても見出せるのではないだろうか。そのような観点から、『ビュビュ・ド・モンパルナス』における「savoir」の使用法について、以下、考察をめぐらせたい。

II. モーリスの場合 ～「行動する男」の滑稽さ～

まず、タイトルになっている「ビュビュ」ことモーリスの場合である。最初の2例から見よう。

Il [=Maurice] savait qu’en affaires il faut toujours se montrer exigeant. (p.68)

En réalité, ses idées d'avenir n'étaient pas précises, mais il [=Maurice] savait qu'il faut de l'argent et une femme. (p.71)

やはり « savoir » に続く従属節が現在形であることよって、格言のように、一般論のように語られている。しかしこれらがまったく個人的な確信であることはマルトの例と同様である。「仕事では、常に高い要求をするようではいけない」といったヒモ稼業の鉄則や、「何はともあれ、金と女が必要だ」という処世訓は、モーリスやモーリスのような男達にとっての常識であって、万人に通用する一般論ではないのである。次の例はどうだろうか。

Une fois elle [=Berthe] préparait des œufs sur le plat. Elle mit le sel et le poivre tout de suite après avoir cassé les œufs. Maurice savait qu'il faut le mettre lorsque les œufs sont cuits. Elle dit, d'une voix aigre : « Mais enfin, laisse-moi donc faire. » Maurice, qui était un homme d'action, croyait à la nécessité des châtiments corporels. Il la gifla, persuadé qu'une gifle fortifierait en elle le sentiment de la vérité. (p.78)

フィリップはくどくどとした説明で、読者をうんざりさせることはしない。モーリスがベルトを咎める描写の代わりに、「彼は知っていた」と書くのである。「pensait」でも「sentait」でもなく、「savait」。加えて、「croyait」、「persuadé」という言葉が、「un homme d'action」であるモーリスの確信に満ちたふるまい、ひいては生き方までを浮き彫りにしている。彼の内には、確固たる「vérité」があり、彼がベルトを殴るのは、彼女の内にその「vérité」を定着させるためなのだ。では4つ目の例に移ろう。

Il [=Maurice] savait maintenant que la vérole fait partie de la vie des hommes. Depuis longtemps il le savait, mais il est des connaissances qui ne sont pas gravées profondément dans nos cœurs. (p.104)

「梅毒が人間の生活の一部である」ということを、モーリスは「知っていた」。ここでも確信をもって断言されているが、彼の言うこの「vérité」が、人間全体、もしくは男全体に広げられるような真理でないことはこれまで通りである。しかし、ともあれ、彼はそのことを「知っていた」のである。

我々はまた、こうした態度を、彼の友人の内にも見出すことができる。以下は、モーリスの友人グラン・ジュールの「知っていた」ことである。

Il [= Le Grand Jules] savait qu'au bout du monde il y a la prison de la Santé et regardait cette idée face à face. (p.77)

グラン・ジュールは、「世界の果てにはサンテ刑務所があるのだ」ということを「知っていた」。れっきとした事実のように断言されているが、やはりこれも、グラン・ジュールやその仲間達にのみ通用する « vérité » でしかない。しかしながら、金庫破りも人殺しもお手の物というグラン・ジュールにとっては、「正面から見つめる」べき、当然の覚悟なのである。

モーリスもグラン・ジュールも、自らの経験から得た個人的な意見を、これこそ「真実」と確信してゆるがない。彼らは、これらのことを思ったり、感じ取ったりするのではない。「知っている」のである。

自らの真実を絶対的なものとみなし、確信をもって行動する、ひとりよがりな男たち。フィリップはこうした男たちの見る一面の真実を、 « savoir » という語を用いて、あたかも一般的な真実のように描く。「彼は知っていた」と書くことによって、その偏狭な価値観を皮肉っているのである。

Ⅲ. ベルトの場合 ～「哀れな街娼」の弱さ～

では、モーリスの情婦、ベルトの場合はどうだろうか。

花屋で働いていたベルト・メテニエは17歳のとき、モーリスと出会う。同棲を始めてから2年間は、モーリスが父親から譲り受けた5000フランによってゆとりのある暮らしをすることができた。しかし2年後、5000フランはなくなり、モーリスはベルトに売春をすすめる。この2年の間に、ベルトはモーリスから受ける暴力にも、悪事に身を染めているモーリスの交友関係にも、またゆとりのある暮らしにも慣れていった。こうして19歳の彼女は売春婦となり、そうした自分の境遇を受け入れるため、以下のように正当化する。

Depuis longtemps Berthe savait que celles qui sont filles publiques font tout simplement comme les autres. (p.80)

ベルトは物事を自分の良いように歪曲させて信じ込もうとする。それによって、自分の行為を正当化し、その運命を受け入れようとするのである。先に引用した例を今一度見てみよう。

Elle [=Berthe] savait de quoi se compose l'amour depuis qu'elle laissait les mâles après elle courir, qui profitent de toutes les faiblesses et satisfont tous leurs besoins. Elle savait qu'il faut convertir l'amour en espèces, car l'amour est fatigant, et c'est l'argent qui reconforte. Tout cela, Berthe le savait à vingt ans. (p.90)

これらの例から浮かび上がるのは、過酷な現実を前に、人生をあきらめきった一人の売春婦の姿である。彼女は、「20歳にして知っていた」という言葉で、自分を正当化しているが、その現実から逃れ出ることができない原因は、彼女の弱さ以外の何ものでもない。借金があるわけでもなく、ヒモに四六時中見張られているわけでもない。若くて美しい彼女が生活を変えようと思えば、それは可能なことなのである。

現に彼女は父親の死に衝撃を受け、これではいけないと思い立つ。モーリスが窃盗で捕まり刑務所にいる間に、ベルトはピエールと共に暮らし始め、再び花屋で働き出す。しかしある晩、モーリスがやって来る。ピエールの家で眠っている彼女のもとを訪れたモーリスは、彼女に平手打ちをくらわせ、引き立てていく。このときベルトはまず死を思う。けれどもすぐに、本当に死にたくなかった時に死のうと思いなおし、モーリスに従うのである。一筋の希望を見出したかに思えた彼女であったが、最後にはその諦観に屈してしまう。

こうしたベルトの性質を、フィリップは、「*douce et pliante*» (p.74) «*flexible et malléable*» (p.82)という形容詞で表現する。そして次のように語る。

Étant faible, elle [=Berthe] avait besoin d'un soutien ; étant douce, elle avait besoin de bonnes paroles. (p.68)

たしかにベルトの「知っている」ことは、モーリスに支配され、その価値観を植えつけられる中で生まれてきたものだ。けれどもその根幹にあるのは彼女の「弱さ」や「おとなしさ」であり、それが彼女の諦観を引き出しているのである。

同様の例として、ここでもう一つの場合を挙げておきたい。ベルトの父ジャン・メテニエの「知っている」ことである。

Il [=Le père de Berthe] savait que les filles de Paris flottent entre toutes les tentations et leurs pères, leurs pères les Pauvres, ne peuvent rien leur offrir pour les en préserver. Il savait que nous sommes des manœuvres et des chiens et que nous n'avons pour nous que la misère, dans un monde où la misère est maudite. (p.75)

妻亡き後、7人の子供を男手一つで育てあげた貧しき父親。自分の娘が揃って売春婦となってしまった父親のあきらめが、ここに吐露されている。だが、貧しき父親がその娘たちを守るためにできることは、本当に何もないのだろうか。

彼は、「我々は労働者であり犬だ」という自虐的な言葉で自分を見限り、「我々にあるのは悲惨さだけだ」と悲観しきっているが、彼の娘たちが売春婦になったのは家が貧しかったからではない。家族を養うためにやむを得ず身を売ったのではなく、ならずものの男に恋をした結果そうなったのである。つまり、貧乏であることと、娘たちが墮落したこととの間に直接的な因果関係はないのである。

ベルトの父は、最初からモーリスがどんな男かを見抜き、ベルトに交際を禁止していた。しかし、それでもモーリスに会い続けるベルトに対し、「それがあの娘の運命なら、自分のできることは何もない。」とあきらめてしまう。貧しさのせいになっているが、悲惨な事態を招いた原因は、彼自身の弱さにあったのである。

ベルトとその父親の「知っている」こと。作者フィリップがここに描き出しているのは、人生に対するあきらめである。彼らは、ほかならぬ自分の人生をあきらめる。「人生なんてこんなものだ」と一般化することで、自分の弱さや過ちから目をそむけているのだ。

しかし、フィリップがこうした彼らの弱さを非難することはない。強い者がいて、弱い者がいる。弱い者があきらめざるを得ないのは、世の中がそのようにできているからなのだ。

たしかに彼らは弱い。自分の弱さや過ちを正当化し、運命を受け入れて無抵抗に生きるほどに弱い。しかし、人間がいる以上、悪をなす者も身体を買う者も売る者もいなくならないのだとしたら、その弱さを誰が責められると言うのだろうか。

「なぜまだ売春をするのか」と問うルイに対し、「人が皆自分のしたいことだけしているとも思ってるの？」と答えるベルト。フィリップは、こうした、自分の運命をあきらめざるを得ない者の悲しみを深く理解し、慈悲深く見つめているのである。

IV. ピエールの場合 ～「20歳の青年」の甘さ～

最後に3人目の主要登場人物、ピエールの例を見てみよう。

ピエールは、半年前にパリに出てきたばかりの20歳の青年で、鉄道会社の製図工として堅実な生活を送っている。恋人のいない彼は、夜になると寂しさにいたたまれなくなり、街に出て快樂を買うこともしばしばだった。そんなとき、商売女とは思えないほど、きれいで優しいベルトに出会う。彼はベルトに出会った日の翌日、1時間きっかり5フランで買った彼女との一夜を思い起こして悦に入る。快樂には代償が伴うという状態を当然のように受け入れていたピエール。そこで彼が「知っていた」こととして明らかにされるのは、次のようなことである。

Il [=Pierre] savait que les femmes sont avides et qu'en un tour de cuisses elles absorbent la journée d'un homme. (p.82)

これまで同様「偽客観的」に語られてはいるが、しかしこれは、ピエールの体験に根ざした言葉ではない。なぜなら彼は夜な夜な安い娼婦を買うことぐらいしかしたことがなく、1日の稼ぎを蕩尽するような女を得たことなどないからだ。「女というものはこういうものだ」という決まり文句を聞きかじり、知ったかぶりをしていただけで、自らの経験からそれを「知る」に至った訳ではないのである。さらに次の例である。

Il [=Pierre] ne connaissait pas assez pour oser la [=la vérole] regarder en face, il savait qu'on en cause comme de la Honte et du Mal. (pp.120-121)

親友のルイによって、ベルトが梅毒にかかっていることを知らされたピエール。それは同時に、ピエール自身も感染しているかもしれないという恐ろしい知らせでもある。梅毒患者について得々と語るルイの傍らで、ピエールは恐怖に身を縮ませ、うなだれるしかない。

彼は実際の梅毒患者を見たこともなく、それがどんな症状を生むどんな病であるのかを具体的に知っているわけではない。ただ、《梅毒》＝「恥」と「悪」という世間の常識を知っているだけである。そして、その恥ずかしく恐ろしい病を前に、為すすべなく怯えているのである。

ピエールの「知っている」ことは、世間の常識でしかない。そしてそうした常識や知識は主に親友のルイによってもたらされている。語り手によって以下のように

述べられている通りなのだ。

Le caractère des hommes, à vingt ans, se compose des paroles de leurs amis autant que des mouvements de leur cœur. (p.120)

まさしく 20 歳のピエールの性格は、女についても梅毒についても一家言持っているルイの言葉によって形作られていると言えるだろう。「女とはこういうものだ」、「梅毒とはこういうものだ」というルイの独善的な発言に影響を受け、知ったかぶりをしたり、いたずらに怯えたりしているだけなのである。

パリでの孤独に耐え、日々の勤めと夜の勉強にいそしむピエール。信頼する友との語りになぐさめを見出すピエールだが、しかし、自分の存在をかけて生きてきたモーリスやベルトから見れば、未熟な青二才でしかない。

フィリップは過去の自分を投影したこのピエールの甘さを事あるごとに暴き出しているが、それはこの « savoir » の使用例からも、十分に読み取れるのである。

そしてそれはまた、この小説の結末を暗示するものでもある。ピエールは自分の部屋にいたベルトをあっさりモーリスに引き渡してしまう。夜中の 3 時に、二人の男に乗り込まれたとはいえ、その態度はあまりにも情けない。「自分一人であっても、往来に出て、助けを呼ぶことはできたのだ！」と後悔して泣くばかりで、それを実行に移すことはないのである。

経験に基づいた確信を持たないピエールが、確信に満ちて「行動する男」モーリスの前でできることは何もない。経験と行動のともなわない彼の「知っていた」ことを見てきた我々には、それも当然の結末のように思われるのである。

結論

以上、「偽客観的」に用いられた « savoir » をめぐって、主要登場人物の描かれ方を見てきた。

確固とした信念に貫かれた、「homme d'action」のモーリス。「人生とはこんなものだ」とのあきらめに満ちた « pauvre putain trotteuse » (p.162) のベルト。いまだ人生哲学を築いていない « jeune homme de vingt ans » (p.52) のピエール。

人が何かを「知っている」と言うとき、そこには確信がある。そして、どんな性質の人間で、どんな人生を歩んできたかということは、どんな確信をもつに至ったかということにも現れてくるのではないだろうか。

« savoir » による人物描写がもたらす効果。それは、各人の常識であり信念を提示

することによって、その性質やそれまで歩んできた人生を端的に表すというものである。つまり、フィリップは、「savoir」一つによって、作中人物がどんな人間かを描き出しているのである。

そしてまた、その「savoir」が「偽客観的」に用いられることで、もう一つの効果が生み出される。各人が「知っている」とされることは、なるほど各人にとっての現実であり、真実であろう。彼らはその生い立ちや生活環境、交友関係、経験などから、それを「知る」ようになったのであるが、しかし、それは非常に個人的なもので、何らの普遍性も備えてはいない。

フィリップは、それをあえて「彼（彼女）は知っていた」と書くことによって、そうしたことに無自覚な彼らの姿をそのまま描き出す。それによって、白黒はっきり割り切って生きる者の滑稽さや、物事を一般化して見ることで自分を正当化する者の弱さや、世間一般の知識を得て人生経験を積んだつもりになっている者の甘さを示唆しているのである。

とはいえそれは、その愚かさを笑いものにするための揶揄といったようなものではない。語り手は、各作中人物に同化し、「彼ら」をしばしば「nous」「nos」で受ける。「彼ら」を突き放して見るのではなく、ヒモも、売春婦も、気弱な青年も、すべて自分の仲間として、「我々は」と語るのである。

自らの「知っている」ことを、事あるごとに誇示せざるを得ない作中人物たち。それはまるで、吊橋を一步一步確認しながら、踏み出していく人のようである。この部分は朽ちていて危ない、この部分はしっかりしている。それを「知る」ことによって、吊橋のどこを渡ればいいのかを見極める。そして吊橋の先にあるものに近づこうとするのである。では、吊橋の先にあるものとは一体何なのだろうか。

以下の文章を見てみたい。

Pourtant il n'y avait lieu pour elle [=Berthe] d'avoir tort ou d'avoir raison, mais nous cherchons partout l'assurance de nous-même qui fait partie du bonheur (p.143)

[...] nous qui sommes des femmes sans appui, avec des cœurs incertains et qui cherchons la certitude sur les routes (p.156)

ここで言われる「l'assurance de nous-même qui fait partie du bonheur」「la certitude sur les routes」、そしてその後も現れる「la bonne certitude de vivre」(p.183)、「la certitude d'un bonheur」(p.187)といった言葉。これこそが、彼らの見つけようとし

ているものなのではないだろうか。

« bonheur » につながる « assurance » や « certitude »。引用文においては、主にベルトら売春婦の口を借りて語られているが、幸福になりたいと願って、その確かな手がかりを得たいと望むのは彼女たちだけではない。金と女を得て、人生を楽しもうとするモーリスも、優しい妻を得て、ささやかでもあたたかな家庭をもちたいと願うピエールも、それぞれの幸福を夢見ている。

そしてまた「不安定な心」をもち、だからこそ確かなものを得たいと望むのもまた彼女たちだけではない。たとえひとりよがりであっても、自分の心に刻まれた確信に絶対の自信をもつモーリスも、友人や書物から得た知識に振り回されながらも、自分なりの確信を得ようと懸命になっているピエールも、やはり「不安定な心」に脅かされている。

我々は皆、人生という吊橋の先にある幸福をつかもうとするが、時には朽ちた部分に足を乗せてしまい、痛い目にあう。それゆえに、足を乗せても安全な、頑丈な部分はどこなのか、その確信がほしいのではないだろうか。

「自分はこれを知っている」と言うことは、自分の踏み出すべき一步を確認することにほかならない。しかし、その確信が正しいかどうかは誰にも分からない。実際確かなものなど何もないのだ。

愛と金と悪の支配する世の中に生きるモーリス、ベルト、ピエール。それはフィリップ自身の姿であり、また読者の姿でもある。幸福に至る確かな手がかりを得ようとあがく人々の姿を描くことで、フィリップは、我々すべての人間の弱さ、悲しさを映し出しているのである。

注

Charles-Louis Philippe, *Bubu de Montparnasse*, Garnier-Flammarion, 1978 からの引用は、直接本文中にページ数を示す。また、下線は引用者による。

1) ヒロインであるベルトの姓をメテニエと名づけていることからその影響はうかがえる。

2) Leo SPITZER, « Pseudo-objective Motivation in Charle-Louis Philippe » dans *Representative Essays*, Stanford University Press, 1988, p.55.

Essai sur *Bubu de Montparnasse*

— De la description des personnages par l'usage du verbe « savoir » —

Maiko TOKAI

En s'attachant à l'usage original du verbe « savoir » dans *Bubu de Montparnasse*, on examinera son incidence sur la description des personnages.

Dans ce roman, on compte quinze exemples d'emploi du verbe « savoir », au sens de « to know » en anglais, accompagné d'une proposition subordonnée au temps présent. Normalement selon cet usage, la phrase nous laisserait à penser que le contenu est évident. Mais Philippe l'applique aux cas où il se rapporte à une seule personne, sans généralisation.

Cet artifice a été nommé « motivation pseudo-objectivité » par Léo Spitzer. Il a surtout traité la proposition causale introduite par « à cause de », mais il a aussi marqué la « pseudo-objectivité » de « savoir ». Il nous soumet un seul exemple :

Elle [=Berthe] savait de quoi se compose l'amour depuis qu'elle laissait les mâles après elle courir, qui profitent de toutes les faiblesses et satisfont tous leurs besoins. Elle savait qu'il faut convertir l'amour en espèces, car l'amour est fatigant, et c'est l'argent qui reconforte. Tout cela, Berthe le savait à vingt ans.

Spitzer explique : « Bien que la maxime soit explicitement caractérisée comme ce qui dérive de l'expérience de Berthe, l'usage de « savoir » avec le temps présent suggère la reconnaissance d'une vérité commune. »

On développera cette thèse par l'analyse de la description des personnages à l'aide de quinze exemples, classés en trois catégories :

1. Maurice, ridicule d'« un homme d'action »
2. Berthe, faiblesse d'« une pauvre putain trotteuse »
3. Pierre, naïveté d'« un jeune homme de vingt ans »

Cette analyse nous permettra de relever deux effets concernant la description des personnages et de découvrir ce qu'ils recherchent. On pourra ainsi en conclure que Philippe, en décrivant la faiblesse et le courage de ces personnages, nous dépeint des hommes pitoyables mais attachants.